



真宗大谷派 東岳山  
安泉寺

〒496-0945  
愛知県愛西市三和町中ノ割173-1  
TEL: 0567(28)0001  
Mail: dai5noro@gmail.com

登録してね



ANSENJI.AISAI



2026年

2  
月号

NO.179

泉  
-IZUMI-

―目次―

表紙「鐘撞き」

百折不撓「年末年始の安泉寺」

野呂大悟

福島からこんにちは

野呂美道

言われなくてもする

野呂美道

吾子よ

野呂美道

それでも人生には意味がある17

勝田茅生

掲示板・お知らせコーナー



煩惱も 笑い飛ばすや 除夜の鐘

博子



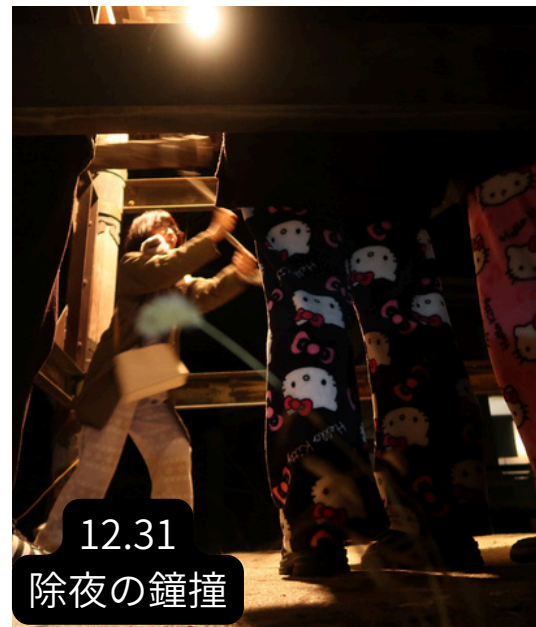
12.31  
餅つき大会



12.30 (キャンドルナイト)



1.1修正会と水田一家



12.31  
除夜の鐘撞



「集い、繋がり、縁になり、いのちの答えに出遭える場所——安泉寺」

お寺は本来、誰にでも開かれた場所です。安泉寺は、五つの「円（縁）」を大切に、皆さまの人生に寄り添う拠点でありたいと願っています。

- 一、誰もが集い、笑顔がこぼれる場所。
- 二、孤独を解き、ご縁が繋がる場所。
- 三、活きた情報が集まり、地域を支える場所。

こうした「集い」と「繋がり」が入り口となり、いつしかそれは、目には見えない不思議な「縁（えん）」へと育ってきます。

- 四、仏法を頂き、智慧を授かる場所。
- 五、そして、自らの「いのち」の深淵に向き合う場所。

賑やかな交流の先に待っているのは、静寂の中で自分自身と対話する時間です。ふとした瞬間に訪れる、人生の根本に触れるような宿命的な「出遭い」。それこそが、私たちが生き

ていく上での確かな「拠り所」となります。

年末年始に行われたキャンドルナイトの幻想的な灯り、活気あふれる餅つき、そして静寂の中に響く除夜の鐘から、厳かな修正会へ。この年末年始、本当に多くの方々が安泉寺に足を運んでくださいました。境内を歩き交う皆様の笑顔と熱気に触れ、こうしてご縁をいただけたことに、住職として改めて深く感謝申し上げます。

しかし、賑わいの中でふと立ち止まり思うことがあります。お寺という場所は、単なる「イベント会場」であってはなりません。行事の楽しさは大切な入り口ですが、そこには必ず、その先へと続く道が必要で。様々な人々が集うことがきっかけとなり、その出会いがかけがえのない「縁」へと育つ。そして、互いを認め合う共生の社会へと広がり、最終的には「私自身の人生はいかにあるべきか」という深い問いに向き合う場所へと着地する。その着地点を用意することこそが、上に書かせていただいている安泉寺のコンセプトの真意です。

昨今、「共同体の解体」や「祭祀継承の断絶」といった言葉が聞かれ、地域や血縁の絆が希薄になったと言われます。確かに、現代社会において人と人との関わり方は、時代とともにその形を大きく変貌させています。しかし、人間が本質的に他者との関わりなしに生きられない存在である以上、繋がりそのものが崩壊することは決してありません。形は変われど、人が人との関わりを求める心は不変です。

だからこそ、私はそのコンセプトを軸に活動を続けてまいります。「集い、つながり、円（縁）」になり、いのちの答えに出遭える場所「安泉寺」。このコンセプトを軸に、イベントの高揚感だけで終わらない、静かで深い安心感を皆様にお届けできるように尽力してまいります。この場所でのご縁が、皆様それぞれ「いのちの答え」に出遭う道しるべとなるよう、一つひとつの行事、日々の活動に取り組んでいきたいと願う今日この頃です。

◆写真に写っているのは、左から水田美妃さん（母）、大河君（三男）、修君（長男）大和（ひろと）君（次男）、修君が持っているのは十数年前、東別院に保養に来た時の写真だ。◆お世話になった野村さんに会いに来るために、大みそかの午前零時に福島の本松市を出発、午前十時過ぎに無事安泉寺に到着した。◆昨年十月に水田家を私たちは訪問したが、修君と大和君が会っていないので、どうしても野村さんに会いたいと、来てくれた。嬉しい限りだ。◆何度も言うが私は子供が成長してゆく姿を見るのが何より好きだ。あの時の甘えん坊がこんなに立派な大人になってくれたとは言葉を超えた喜びだ。◆彼らは、到着早々、安泉寺の餅つき大会、年越し蕎麦打ち体験、除夜の鐘撞きと、多くの行事に



水田一家

参加した。疲れているのをものともせず、初めての体験を満喫した。◆夕食に、自分たちの打った蕎麦を完食し、大いに飲み、大いに語り、十数年ぶりのホームステイを再体験した。この日ばかりは我が家も十二名の大家族、賑やかな大みそかとなった。◆あくる日も、安泉寺の修正会（しゅしょうえ）に参加し、午後福島へ帰った。彼らが自宅についたのは元旦の午後十一時過ぎ、弾丸ツアーの強行軍だった。◆ほかに、野村さんが安泉寺に居ることを聞いて、お別れに一目会いたいと来てくれる客の何と多かったことか。本人はまだ死ぬつもりはないというが、ALSの進行は未知数だ。いつ歩けなくなるかも分からない。◆彼は元気な時に大勢の人に人生の種を蒔いた。今、それが実って収穫の時期が来たのだ。豊作物に囲まれて何と幸せなことだったろう。

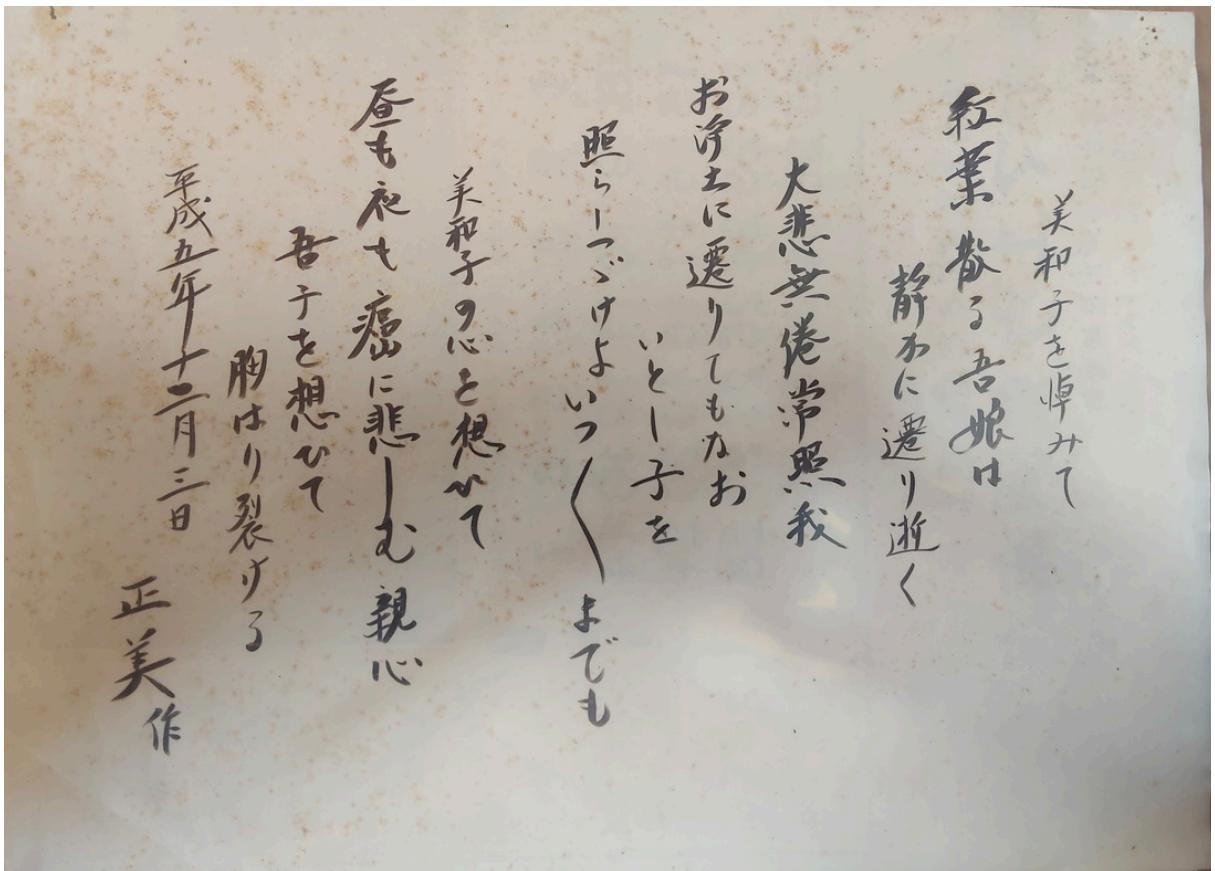
蕎麦打ち



◆「心の時代」で放映された、災害ボランティアの草分け、草地賢一氏の生涯を紹介する。◆牧師の草地は神戸の出身。阪神淡路大震災の時に、ボランティアとして復興に尽力。彼のモットーは「言われなくてもしない 言われなくてもする」ということ。◆当時、復興の青写真を行政の人達から住民に示された。草地は一方的に出された復興計画を認めなかった。なぜかという、そこには住民の意見が反映されていなかったからだ。だから彼は「言われてもしなかった」◆その一方で、彼がしたことは、地域の住民たちの生の声を聞く事だった。「避難所をこうしてほしい」「自分たちで活動したい」……。このような意見を徹底的に聞いた上で、ボランティアたちと共に、誰かに「言われなくてもする」というスタンスを生涯守り通した。◆悲惨な少年期を過ごした草地は青年になってからキリスト教と出会い、牧師となった。求めるものは神の示す「公平と平等」であった。教えに羊飼いの話がある。はぐれた一匹の羊を探して、それを見つめるまでキリストの旅は続く。(誰も取り残さない) ◆彼と行動を共にした村井雅弘は語る。千九百九十九年に起きたトルコ地震の時、草地に同行する。地元の被災者ととことん話し合った住民は「市民ホール」を復興することを最も強く要望した。なぜなら、そこは婚礼や葬儀、集会など諸々の市民の生活の基盤だったからだ。◆彼らは日本で集めた支援金を元に、トルコ市民の手で市民ホールを再建することを要望した。その後、敗血症で五十八才のあまりにも短い生涯を閉じた草

地。しかし、その遺志はトルコ市民に受け継がれ、ホールは見事に現地の人達で復興した。◆生前、これも最後に支援をしたパプアニューギニアの災害の話。同じように現地の人が切望したのは「学校を作ってほしい」ということだった。災害から立ち上がる最も大切なことは若者に教育を受けさせることだと住民が判断したからだ。二千三年、草地の遺族が完成した学校を訪れた。大歓迎を受けた。校名には「ケン・クサチ」という文字が刻まれていた。◆今、草地の遺志を受け継いだボランティアが能登で行なっていること。それは足湯だ。心の触れ合いを通して被災者を下支えするというアイデアだ。◆草地の思いを多くの人が共有してほしい。





◆上の句は老僧の叔父、早瀬正美（故人）の作。数十年前、最愛の我が子を癌で亡くした後、慟哭の気持ちで短歌に表わしたものだ。先日、彼女の三十三回忌の法要があり、その時に施主から紹介された。◆三十二年を経て、父親の娘に対する想いをこの短歌で知り、私はその時の状況が目に見えかんだ。

◆人生を生きる親にとって、最も辛いのがわが子との別れである。しかし、それは往々にして起きる。どんな家庭にも、それは起こり得るのだ。この時の親の気持ちに寄り添ってみると、しばらくは声も出ない。涙も枯れる。受け止められない現実がある。

◆人生にはまさかの坂がある。どんなに理不尽であろうと、それは人智を超えたところで起きることがある。亡くなった最愛の娘へのせめてものはなむけに、おじは渾身の力を振り絞って、この短歌を認（したた）めた。叔父はこの歌を詠むことで、娘との決別を公にしたのだと思う。◆詩人宮沢賢治は最愛の妹との別れを「永訣の朝」という美しい詩に昇華させた。その後の数々の作品には妹との別れをモチーフにした傑作が続く。◆叔父は二年前に他界した。今頃はお浄土で最愛の娘と再会し、嬉しい日々を送っていることだろう。「お父さん、やっと来てくれたのね。」

## 第二章 苦悩を生き抜く

## ◎ 解放そしてさらなる受難

◆ 1944年の夏頃から、ソ連の赤軍は東から、その他の連合国軍は西南から、それぞれドイツ占領地域に攻め入り、ドイツ軍を撤退させ始めました。強制収容所に捕らえられていた被収容者たちも次々に開放されていきました。フランクルのいたテュルクハイム収容所も、アメリカ軍によって解放されました。その3日後、ヒトラーが愛人エヴァとともに自殺し、ドイツの敗戦が確実なものとなりました。◆ 約2年にわたる拘束が解かれ、ようやく自由の身となったフランクルですが、意外なことに、その瞬間は歓喜に叫ぶこともありませんでした。彼だけでなく、まわりの被収容者たちも、白旗が掲げられた収容所のゲートにふらふらと近づきながら、何の感情も表わせないでいました。◆ あれほど自由を夢見たのに、あまりに長い間希望を抑圧されていたため、彼らはその自由が現実のものとは思えなかったのです。フランクルを含めた被収容者たちは、まず空腹を満たし、休養を取り、時間をかけて人間らしい感情を取り戻す必要があったのです。◆ 当時、ウィーンは連合国軍とソ連軍の共同統治になっており、また鉄道などの交通手段が分断されていたので、フラ

ンクルはしばらく故郷にもどることができませんでした。その間、米軍の依頼で、南ドイツで負傷者の治療をしたり、米軍のラジオ放送で戦争直後の心理問題について話をしたりしました。また、没収された「医師によるメンタルケア」の草稿を書き直す作業も少しずつ始めました。◆ 8月15日、日本の全面降伏により第二次世界大戦が終結しました。フランクルはようやくウィーンに戻れることになりましたが、その直後、彼のもとに悲しい一報が舞い込んできました。最愛の母が、一年以上前に亡くなっていったという事実です。母エルザは、フランクルがアウシュヴィッツに移送された数日後、同収容所に送られ、すぐガス室行きとなっていたのです。◆ 生きて母親と再会することをずっと支えにしてきたフランクルは悲嘆に暮れました。なぜ善良な人間が、かくも残酷に殺されなければならなかったのか。この悲しみは生涯、癒されることがありませんでした。彼は後に、「自分に信仰がなかったら、首をつって死んでいただろう」とまで言っています。(続く)

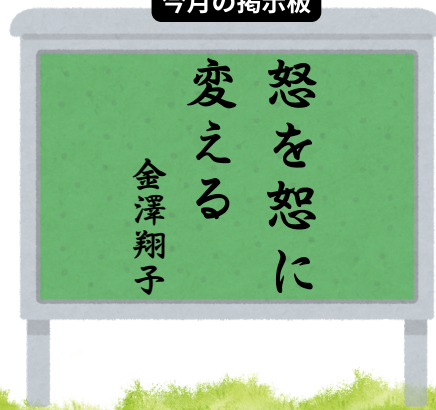


# お知らせ コーナー

## 2月の予定

- 防災会議・大成講 一日(日)
- サロンいずみ 四日(水)
- コウノトリ会 八日(日)
- 文芸クラブ例会 十二日(木)
- パイプライン役員会 十四日(土)
- 写真クラブ例会 二十一日(土)
- 三江会役員会 二十三日(月)

### 今月の掲示板



◆元旦の中日新聞の社説より。ダウン症の書家、金澤翔子さんが母と取り決めをしました。「お母さんが怒った時、必ず『怒』(じよ)と言って、にこっとしてね!」怒は「思いやり」の意味です。文字のわずかな違いで、全く反対の意味になります。今の世界に必要な気がしてなりません。

## 訃報

阪田茂子さん 享年93才 愛知県みよし市  
中山朝子さん 享年71才 名古屋市港区

### いずみのほitori (老僧)

#### ◎「サロンいずみ」開催へ

近所のお婆ちゃんたちが来て言いました。「わたしらあ、食べてテレビ見て寝るだけ。何かお寺でやってくれんやろか?」早速「サロンいずみ」を開くことになりました。誰でも参加できます。生活に役立つことや、おしゃべり会を、お茶を飲みながら楽しくやりましょう。

#### ◎防災シンポ

名古屋大学の豊田講堂で「防災人材交流シンポジウムつなぎ舎(や)」というイベントに妻と共に参加しました。詳細は別紙「ハザード便り」に掲載しました。防災のお話や、レポート発表に感動しました。特に仕事がらみとは思いますが、若い人たちが大勢参加していることが印象に残っています。とても心強く思いました。

#### ◎コウノトリの奇跡

NHKの「まるっと」という番組があります。最終日の二十三日はコウノトリの特集でした。取材中、せっかく見守り隊を結成したのに、その後、十一羽まで増えたコウノトリが一羽もいなくなってしまう現状を嘆きました。「来てくれるといいのにな」と思っていた翌日、コッチー君という個体種が本当に姿をあらわしました。これぞ、コウノトリの奇跡です!